



0 1 2 3 4 5
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
JAPAN
TAMIA

6
門
號
卷

目次

○

後卷二

一

蝦夷風俗彙纂後編卷七目次

○雜錄

蝦夷並北蝦夷習俗

記臆の事

旅裝の事

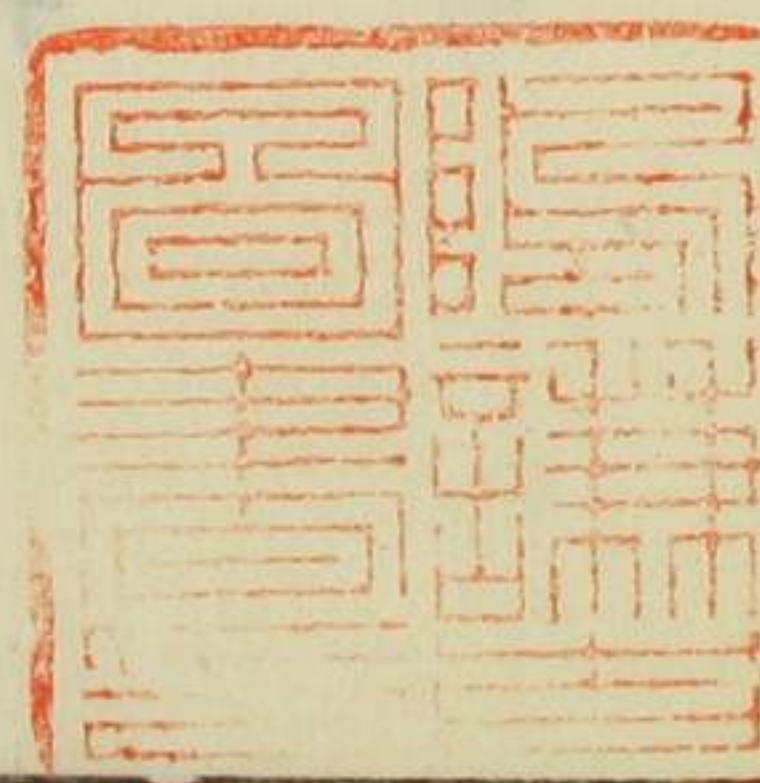
腕力の事

製墨の事

火を揉出す事

土人へ賜物廢止の事

月代を忌む事



血を忌む事

器物を秘藏する事

犬を使役する事

子なき時神を祈る事

雜混寢の事

人足の事

擇捉人高田屋金兵衛を慕ふ事

蝦夷人赤人ふ親む事

浴せざる事

水豹等の臓數をある事

ベウタニケの事

落葉を衣の代ふ用ふる等の事

山神ふ酒を供する事

蝦夷地饑饉の事

蝦夷牧馬の事

染料の事

蝦夷うられめ事

夷女高尾と名のる事

藩士夷女の手を取て辱めらるゝ事

勇を以て感服せしむる事

蝦夷人を使役する事

蝦夷人ふ平伏せしむる事

井を堀る事

蝦夷地へ穀種を渡さうる事

疾病の事

蝦夷地へ鼠群集の事

文字及暦法なき事

廁の有無大小便の事

雪焼の事

飼犬窓より墮入事

小人穴居せし事

オキナ魚の事

カチコルベ魚の事

カムイシマ魚の事

蝦夷風俗彙纂後編卷七 目次終

蝦夷風俗彙纂後編卷七
木成文すはて非也。是すマヒノ舞川野草木離島等出
ヒア爾も土品あひ。又大丈キ善加ホシ等
さき○雜錄

○蝦夷並北蝦夷習俗

蝦夷人の風俗を見るよ。年貢なき國あまば。租稅を出
心配もあし。金銀不通用なれば。金銀を儲貯る貪慾
も起らば。野菜を食せざきば。田園を耕す骨折もなく。
美服着用せざれば。色品摸様恰好等の望もなく。魚類
も澤山ある國なまば。朝夕は食物をも患へば。毎日悠

々緩々として遊び戯を。月日を送るなり。是蝦夷一般の風俗なり。蝦夷草紙。

唐太島の夷人習俗ハ。元地ハ同じと雖も。亦少し異様ニ事もあるなり。人氣元地ハ比キ達バ。稍々豪強凜然たる處あるよし。衣服元地の如くアツシを着まれども。ヨタラツペと稱する草茂以て織ミ衣となし。服をる者亦多し。ヨタラツペの地合。アツシハ比キ達バ。緻ふして頗る上品あり。又犬皮を着服せる者多し。履ハ水豹皮を以て作り。是をケリと稱す。煙草を納る器。山丹製ヒ皮にて作りたると。腰ハ提る者多し。女夷モ耳

環の外。山丹渡來の青玉等を數個連ね。數珠の如く。頸より胸前ハ垂下せる者多く。且所謂マキリといふ小刀二個を左及右尻臀ハ垂下。而して口吻ハ黓モれども。手腕モ其事なき。似たり。

元地ヒ女夷ハ。既小嫁せるものを。必手腕モ黓。又歸俗の者も徃々あり。聞く。近來役夷人ヒ役名改まり。總乙名を庄屋。脇乙名を總名主。總小使を總年寄とし。上下着用ヒ免許ありて。乙名を名主。小使を年寄。土産取を百姓代と改めたり。此等を袴羽織を着用の免許。よし。亦魚皮を縫合せて服するもヒを見る。

女夷ふ多し。魚もイトウ鮭魚の皮を多分ふ用ふ。外何魚の皮ふても用るよし。又此邊比風谷ふも。小兒額髪ふ飾りとあむ。赤小豆ふどよりも一等小粒ある練物也。王を連ねて。三角也形ふし。髪ふ結付るなり。同島ホロコタシ男夷の容貞。オロツコふ比毛きバ。稍陰相ふ似くる。悍黠狡智也者と思むる。性情交易を事とし。甚貪惡あり。麤暴にして人ふ接るふ。揖讓の禮を知らば。其人品蝦夷ふ及むざる遠し。

蝦夷人ハ。徃々豪傑衆を御せるの才可るも比毛きども。概むるふ魯鈍懶惰者多けまば。黠ふもあらば。

髪ハ頂上ふて左右ふ分けて。後ふて束ね。三つ組ふして。垂達置くもと。オロツコと異ある事なし。耳環を付る事も亦同じ。衣服も皆滿州也品を用ふ。木綿獸皮魚皮あり。其製寛大よして。丈ハ腰の上ふ止る。脚絆ハ木綿をも用ひ。又ケリとももく。此節も大抵洗足の者多し。腰髪ふマキリ刀をバ佩ひざるなり。女夷ハ色白く平顔ふして頬だけ。オロツコ比婦人より少し品可るふ似くる。人を見て顔を上げば。俯して羞を含む意有るハ。蝦夷の女子ふ同じ。髪を頂上ふて分け。後ふて三つ組ふして下げ。或ハ結ひ置く事。オロツコふ異なる事

なし。服も皆滿州の物みて。丈長く踵ふ及ぶ。裾ふ真鎗
みて。小ある紋を並べ付る事。又オロツコふあふじ。但
帶も。家居及び近邊往來の時も用ひ。遠方へ行時の
み用るよし。耳環ハ銀環ふ青玉或ハ瑪瑙を下げ。一耳
ふ四つ或ハ三つ位。下げる飾とあり。兒女といへども
皆同じ。但念珠の如きものと頸ふ掛くるハ見ば。又小
兒を縛し置て。チヤクカといふ物。オロツコと形を異
ふ。其製ハいづ。板木の一尺徑許なるを二つ小割
り。丈一尺五六寸ふして。鑿抜きて竹筒を割る。如く
ふし。下ふ底を残し置。犬の皮を以て其筒ふ敷き。其中

ふ小兒を入。底ふ腰を掛け足ハぶらうと下る様ふ
して。足をバ皮みてくるニ縛し置。右チヤクカふ綱を
附。釣り置く事なり。乳をのまいも其儘抱きて飲ませ。
但夜分ハもづして。抱き卧キといふ。シリマヲカ住夷
ハ蝦夷人種みて。風俗又絶て異ある事なし。何の年此
地み占居せしや。其詳うあると得ざれども。コタシケ
シと本地ハ中間み。オロツコ人の雜廁する。殆ん
ど奇と稱をべし。當地ハクシユンコタンよう甚遼遠
なる。他の土人ハ如く取て使役する事なし。故ふ
介抱の米穀等も與ふるおとあし。只土人時として。ク

シユンコタン稅館へ謁見み至り。獸皮杯を以て衣服
を貿易する比。故より其食ふ所の物も魚獸肉或も草
根木實なり。服も蝦夷同様。アツレヨタラツペを用ふ。
中國の綿類もあり。器物も往々山丹產を用ふ。衣服も
少しあ用る様子なり。又矢鏃釵杯も其自製より出づ。そ
の地金ハ釘ハ折き等を用ふ。此地一種比鞆あり。其製
木を以てし。風袋ハ魚獸皮を用ふ。其風を發出する口
も木を合せて覓比如く。長さ一尺五六寸。其風を含
む所も琵琶の腹の如く。中央より孔を開き風を吸入す。
側面を魚獸の皮革を以て。袋を作り。是より黏着し。琵琶

腹比如き者比底下より握り。之を用る時。その上下
比握りを採りて。開合運動をき。輒ち風を噴出し。甚
陋麤を極むといへども。愚俗より感せべき物なり。又
水豹と刺し鈎たり。夷語よりトナと云。其製落葉松の直
幹を擇び。其中心を以て五六丈許の長竿を作り。其
末より鉛を結着す。用法河岸或は海濱より。長さ一尺許ある
杭を十餘本列植し。水中より又四五本植。以て竿を
擎け。夷人其竿根を持し。水豹比至るを覗ひ。之を刺す
なり。諸又此地より頭目五人なり。又閥閱を以てなり。
余等より宿せし家比主人を。ノキウナタラと云ふ。其五

人中第二位の者あり。是夜右辻五人を呼來り合ひる
ら。オロツコ一人を召して。此邊の様子等彼是を質問
したり。何分此土人ハ中國の民たる心得の様み見受
たり。タライカオロツコの兩種ハ雜居たりと雖ども。
互み嫁娶ハ通せばといふ。是夜來會せくる。オロツコ
人の名をナカメノといふ。是又一箇の酋長なり。オロ
ツコの風俗定まれる酋長なし。其豪強ある者を稱目
して。アツサラカムイといふ。

アツサラハ夷語事の呈露するおとといふ。カムイ
を神みて。アツサラカムイとハ名比顯それし神人

といふ義みて。其人を稱賛するなり。
之を以て其頭目となし。此ナカメノも其アツサラカ
ムイなり。唯レボロオロツコの地キールフ。チンカン
チーなる者なり。是ハ累世其酋長たる由。其主として。
尊信する所の鬼神也。別みなきホト蝦夷ふ同じ。其至
る所山川せ神を祭る事。亦蝦夷ふ同じ。唯其屋中ふ數
々木偶を置くを見たり。是又神社類といふ。其大一
尺許にて木を刻て人面を作る。眉目鼻口つて耳口あ
し。頭頂ふ木幣を植體ハ水豹皮を以て襲ふ。觀國錄
大口附オロツコ人風俗

オロツコ人も禮儀等を絶て辨知せざる様子なり。物を與へし事も數度なりしが、曾て禮謝の狀あし。一人ふ物を與きバ、後より數人隨ひ來り、與ふるを待つ容ぢらりて。一ふ中國の乞兒非人也如し。あれ全く窮のありらしむる者う。オロツコ人も都て容貌卑陋なり。男夷も顏色柔和。額廣く鼻低く。眼孔細く尻下り。眉毛薄く形柳葉也如し。頬少しふくれ。口付も並。髭鬚あきもの多し。頭髮赤薄く額上みて左右ふ分け。後頂みて三つ打ふ組み垂き置くあり。耳環も銀環ふ瑪瑙の玉を付たるを穿つ事。男女同様あり。衣服ハ滿州製也。

此を着せ。首長たるもの始も皮服を用ひしが。我等嚮導するふ付。宅ふ行しつき。滿州製也紺羅紗也古手と着して出じり。其製僧衣の如く。巾廣みて裳の方廣がうたるもの。襟も合羽也如く右へ深く合せ。真鎰の牡丹掛け二タ所ふ附て志めたり。袖も筒袖みて指先まで掛る様ふしたり。右前ふ合せてあり。魚皮獸皮衣服も皆是よ効ひて製作したるものなり。襪ハ水豹也皮のケリを用ふ。襪ハ巾六七寸長尺許なる木綿也端ふ。コヤ貝也小なるものを並べ付け。一段二段或ハ三段も付たるあり。夫と前ふ下げて覆ふまであり。女夷も容

貌男小替らば。但頬ふくき色白きやどの違ひせみ。勿論柔和なる事も一倍なり。都て男女共平顔みて下品あり。髪を額廻みて左右へ分け。後兩耳は上みて三つ打ふ組み左右へ垂き。或も結びたるもあり。襪褲都て男夷ふ同じ。服も同様なれども。裾ふ清の乾隆嘉慶道光杯の真鉢錢を。並べ着て飾となしたり。帶も山丹比物ふて。皮ふて上ふ真鉢比紋散し様の飾をなし。其下ふ渦巻け如く。真鉢ふて拵へたるものと並べ下げて飾とい。叔又女子年は頃十四五あるべし。酋長は子供ふや。天鵝絨比筒袖の服を着し。ケリをもき。耳環を付通ぜり。觀國錄

東海岸タアイカより奥地ふ。オロッコと稱する異俗の夷あり。其人物大ふ蝦夷鳴ふ異ふして。其言語も又ひとつからば。理髮總て剃切のふとなく。男夷も一組ふして背ふ垂き。或も束て頸ふ垂る。其情態俗習。唯ふ一時の應接なまば。詳あるふとなしといへども。其顔

色容貌下品ふして。異夷無慙を表せり。女夷亦髪を亂垂せば。大抵兩耳の後ふ束ね。或も分組て背ふ垂。又も男夷のがとく。頸上ふ束ねたる者ありて。其状一ならば。其容貌顔色蝦夷島ふ比しては。美艶ふして。且人ふ媚るせ妖態多し。浴湯施粉のことハなしといへども。日々其面を水濯し。其頸を梳う。粧飾をなほもの多し。耳飾の環亦南方と異にして。男夷も小環をつけ。女夷も大環ふして。數環の玉を飾とい。北蝦夷圖說

○記臆の事

夷地ももとより文字ららぬば。たゞ古老の口碑ふ傳

ふるをもて證となは。されども會所ふて稼料の算勘のひとき。聊も違ふことなし。算盤もてけるよりは却て慥なる。又寶もて漁塲を買取りたるも。急度いひ傳へて。後の世までも忘失するあとあく。祖父或は曾祖父の時。何々の鍔。のるひも佩刀もて買あけりなど。シヤモ等の立入り。いひくろめんとねひみも。中々ふ動うむ。常ふ忘るまじと思ふとき。柳樺櫛の幹ふ傷つけ。まゝ繩をむすびて標とせなり。あれ永吉州の俗。里程をそかるよ。柳を挿み繩をむすびて内外を定むる。あれ柳條邊といひたるよ。おのづから髪髣せり。蝦

夷夜 北海隨筆同

卷之七

○旅装の事

蝦夷土人皆草履草鞋を用ひ。蓑笠を着せば。旅路ふ
赴けども厚子の單物を着用する比。帶を有合せた
るもの。或も繩よても。藤蔓の類よても用ふなり。旅行
の道具ふも。力口フと云て。火打道具の提物と。弓箭と
きせる煙草入等のもののみ。蝦夷草紙

旅行の節。キ十一枚則敷物ねり。薰鹿鮭等所持し。夜ふ
なれば。山谷曠原の別なく。右比キ十を敷き。衣服を覆
ひ。傍小火を燃して卧す。通常と。但弓矢を携へ歩

行け。蝦夷雜書

大出の腕力の事。由志那共。古風。又。大出の事。
蝦夷人も。腕と頭ふ力ありて。重き荷を額へてもの
となし負へり。されども腰ふ力なきゆゑに。日本人と
角力残ぬ。ふ勝ものあし。又云。東部の者尤勇悍なり
といふ。北海隨筆

○製墨の事

北蝦夷の内。シリマヲカといふ處みて。行硯の墨薄く
なりしらぶ。水を注ぎ。木の切あて攪拌居たりし。老
人一枚の鍋残持來りて。是残伏せ。その下みて檸皮を

燒きて。其油煙を鳥せ羽みて拂ひ。行硯ふ入れ呉くう
々るづ。少しも墨ふ異なる事なし。老夷いふ。我等矢を染
る時も。皆此墨ふ染るにて。赤と墨とふ染し矢哉見せ
しげ。其赤きを問しうば。シユヘーと答ぬ。依之余それ
とちふふ。赤き岩石を一片呉れより。實ふ不自由なれ
バ。又それなりふ。事濟りと感し侍りぬ。北蝦夷餘誌

○火を揉出を事

久摺字チヌケフの土人。エコレといふもの。揉木もて
火を出しぬ。甚不自由あれ共。古風も愛きべきものな
り。能乾くる板の木へ。獮猴桃クワブンカラの木り赤ごとの木せ。久

しく水ふ浸り晒くると以て揉時も。上下熟して火出
るなり。其木口を吸る燃出。それを櫟皮ふ附るなり。
まゝ山中等ふて。煙草火ふ持行ふ。此木ふ附くる儘
持行。本邦火繩の代として。用を足あと奇なり。

伊勢神宮せ石火屋殿ふても。檜の木と枇杷の木ふ
て揉ば火を出。本邦所々の大社ふても。此揉木を
用る所あるなり。久摺日誌

○土人へ賜物廢止の事

寛政三亥年。同四子年御用の節も。前々よう仕來うの
通ふして。新法を出さば。只升秤を正しくして。交易の

品宜しき物を撰み。老人子供へ飯をふるまひ。貧賤の者つも御手當する事を専要みしたる故ふ。誠ふ蝦夷人悦び歌を謡ひ踊りを舞ひ。難有事を覺えたり。夫みてモ。御金藏へ千兩餘。御益金モ亦納めたり。今度御用地となりて。飯一椀の振まひもなく。土産と名づけ。蝦夷人へ物を與へざる事となり。然うといへども。徳内も。是迄遣し來り。今更與へざる時も。先年より老少の蝦夷を憐みたる所も。却て懐けのためむりのやうふも當り。歸伏せためふもならざれば。自分の物にて與へたき旨。三橋藤右衛門へそりうたきども。決し

てならぬ事となり。前年より約束したるものも遣さば。其言と其實と戻違ひたまば。蝦夷人も悦むば。數度行たるもとなきば。知ける蝦夷も多く約束を違ひたるを氣の毒あり。執事は人々の了簡ふる。物を與へ當坐を悦しめらればとて。永續も覺束なし。當時の恨ふも拘らば。直ある法を立て押せしといふ。至極尤も道理ふ聞ゆるなきども。大なる誤あり。當時の難義ふ拘らば。直ある法を立てる。日本地百姓の事なり。蝦夷も未だ異國同様は民也。當時の難義ふ構もざれば。書經ふ謂ゆる脅從罔治は如し。國法は嚴しきふ。迫脇せ

らきて從ゆる民も國の寶とそあうがよし。殊ふ蝦夷地異國の界なきば。腹心せ民としてもほしき事なり。是即城郭も均しき堅固の地と謂べし。用立たるものへ恩賞として物を遣すより。政事の害となはるべきり。最上常矩厚岸亂申上

○月代を忌む事

松前大野村の喜三郎といふ通詞。蝦夷せ風儀と能く辨へて。蝦夷ふ惶らきたるものなり。蝦夷ども常ふ云けるも。喜三郎を恐るべき人あり。盜を志する者何らハ。髪を剃らんと憤り。又非分なる事なれば。チヤウラ

ケといふ切口上より。使と出んとて皆伏したり。蝦夷人髪剃る事を恐れ。改る言語ふも伏する事如此なり。然る處蝦夷御用地となりて。髪を剃べしと申付る。蝦夷ども恐きざるものあし。若も叶もぬ時も。松前領比方へ逃去るべしといふものもなり。山奥へ引籠り住居せんといふもれもあり。蝦夷ども心落つぬ様子なり。幌泉會所みて。若き蝦夷を月代を剃り。日本の風俗ふ進めて。米酒等を與へくる。其親類せもの云けるも。病死せるも是天命なきば。哀むといへども。除くづきやうもなし。今月代を剃り。先祖より受たる姿

残失ひ衆人ふ交り結ぶ事も能そば。天比罪を遁る所なし。此上ハ蝦夷ども交をも許さば。其身も自ら逼うて惡逆のふとも崩せべしとて甚ざ歎きたり。按するふ禮記王制の篇ふ。器械制を異ふ。衣服其宜を異ふ。其教を修めて其俗を易へば。其政刻ふして。其宜を易へば。是實ふ寒國を治むるふ。思ひ當うたる事あり。同上

○蝦夷人血を忌む事

夷人も殊の外血を見る事を嫌ふ。已ふ松平信濃守手附御普請役格御雇比もの島隼人東夷地渺流紋別の

邊よて子細よりて亂心し切腹したる時。其場所す居合せたる夷人男女とも六七十人不殘奥山へ逃去。人足ふ差支たり。依て番人ども夷人へ利解申含。追々歸郷せしむる爲よ二日滯留せり。都て夷人何事ふよらば。心つかなぞざる事に過ぎバ。直ふ山中へ逃去べしといへり。蝦夷道知邊

○器物を秘藏する事

最上徳内と同道し終日蝦夷中比事と談ざるふ。古器物の事あと問たきども多くもなきよしみて。乙名と稱するもの。所藏比古物と望見るふも。別段ふ一人。

上酒の一升も携へて所望し。人よ立ちざる様あるおもむきよてたのまねば見せざるよしと聞及し。

谷元且蝦夷紀行

○犬を使役する事

夷人アヒトが犬をつのふ。トウタタといひて道を指教す。又も是より彼方へ行時も。カイタタといひて綱と少しぬしらふなり。杖の如き物もて。これかき示す事も有よし。休明光記附録

勇拂領字ハツタルセ。星影明りよ來るや。胡女樺明し戎持て迎ふ來りしげ。我等を見て其明しを犬よ含ませ置。先へ走り歸りしげ。須臾廿間犬を其明しを含て。我等戎嚮導し程よく行し。二三町過て外の犬一匹來ると。夫と噛合。其時火を消たるも可笑事なり。東蝦夷誌

○子なき時神ふ祈る事

蝦夷子なきものハ神ふ祈る。子戎もてバ生長の後髪を切らす。三つ打ふして垂置ぬ。名戎カモイオト神髪と云。按するふ。是太古ノ容と見ゆ。鷹川の夷ホインカル神髪なり。此外處々みたり。斬髪具なき時も。亂垂とあるといひ。三つ組みせしと見ゆ。千島志料

○雜混寐の事

松前のののくうみて。第一の漁といふを。鮭數サ子あり。是と捕事。年よ一盛つ。初夏より中夏までのうちよりうて。十日もううの間。晝夜とよのう手毎ごとく。其時も家臣老職せきけ者まで。残のらず妻め子家族かぞくを引連海邊みよ至る。土人他所人とも。入交いこうり。男子ハ網あとたれ。或も捕つかたるを持運はび。婦人めも其魚その魚さを割數さ子こを取分。是これほし。深夜よ及いたべば。ゆきななうよ打卧う。京の田舎いは大原おや小原この里さは祭禮まつりよ向むかる。雜混寐ざくみくといふ。ひとしく男女めせまのちなく。枕まくらととりぐるよう。不義ふぎ不

埒らなる事多多くしといふ。是を厭いやへば。鮭さととるを妨報うそらるるとて。古いういうあららざざがほして。打捨うちおくくぎ土風ふなりといふ。さるふより。常ふ家臣等かしん。土人どじんふ對たいし權柄けんある事ことられ。狡黠こうの奴等やつも。鮭さととけ時とき思おもひちらせんと惡口おのきししるとなん。土人語ごりける。是これ以いて上じ下しの序正じゆしららば。治はりかぬる事こと推すてあるべし。同上

○人足ひとあしの事

奥地おう。中蝦夷なかへ引拂ひひの時とき。場所々々ごとく。荷物はを持送もうもし。男女めせ夷都夷て朝あより晩ば泊まで持通もうもう。一日いちせ行程こう近ちかきき五里ご里り位い。遠ときハ八九里は八九里はまで。わ

りう。極うたる道といふをちらば。平場ハ海岸の砂
深き所ふあらばきバ。山坂谷間ハ所ゆゑ。五七里よて
も。本邦十里餘の道中戎歩行たる如く。泊所ふ着せば。
草卧し。夷人を荷物を負て歩行する事。場所ふより
三四日を追通せし事。河ふ見えざれども。其段ハ日本
人も勿論。よそき牛馬も及びがさうるべし。右歩行す
るふ。草鞋をそきしものハ稀ふて。大概もざしねう。山
道雪中などハ。いとしき事ふおもつども。夷人ども
ハ左程ふもなきと見えたり。夜ふ入て酒を調へ遣す

せし。ふ。よろこぶ事限りなし。泊所ふ着せし。辻。本邦
せ人と違ひ。泊所へ荷物をおろすまで。足戎洗ふ
事もあく。其儘休息の小屋ふ入。土間ふ火戎たき。其周
りふ居並び。貨米ふ請取し。米を粥み焚。是を食し。夫よ
モ遣したる酒戎打揃て飲とのよし。老たるも火のか
からぬ事を謡ひ遊び樂む事。河う。是をユウカルといふ。
本邦せ淨瑠璃なり。女せ子若夷の手をたゞきて。おど
り遊ぶ事。夜を明し。其翌日も荷物を負ふて七八里も
行あり。一躰心得悠然として。物ふ動ずる事なし。晝夜

の場所杯みて餘りたる飯杯を。老人の中ふも。若年比
ものなどへ遣しても。其もせ一人ふても決して喰せ
ば。縱令少しだりとも。夫々配分して食せるなり。扱女
比子同士集りて。煙草を吸を見るふ。きせる一本ふて
三四入つゝも寄集りて坐ふあり。一吹吸ても次へも
くし。又其通ふして次ふ渡したり吸なり。酒など飲む
其坐ふ居合たる夷人を。少しだりとても受け得さむ
る事ふて。一駄氣前を愚昧あれども。心ざしハ善所も
ありて。小兒も同じく善ものどもありぬべき。蝦夷土産

○擇捉人高田屋金兵衛を慕ふ事

金兵衛ハ去天保四已年二月御咎ふ付。淡路國へ引取
しあり。船乘并產物方の渡世を止まし。東地荷積
の義達てたのめるもの有之。無據一昨年。擇捉の内テ
トメマンヘ荷積として渡海し。酋長共ふ四五年振ふ
て逢々れば。殊の外懷しがり。金兵衛事もいつ頃も
來る哉と。皆々問々る上付。何故スく尋るぞと問
かへせば。酋長ども答て曰く。誠ふ當時ふ至りてモ宛
行向手ひどく。飯ハ博飯一つよねり。仕着布手薄く稼
此賃も。會所比帳面よもやりてす。仕切々々よ志みく
と賃錢を不渡。使ひ方ぞりう嚴敷しぬれバ。一統歸服

せざきども。今日北渡世ゆゑ無據勧居れども。右の譯故實の勧をねむ氣力ハ無之。何卒して以前の公儀小て。金兵衛勤る時比如くいたし度。何故ふ金兵衛を御咎ふて退らきたる事ぞと。公儀を恨み奉るやうの義を述。皆々懇々安否を訪ひ入り。依て金兵衛も答ふる辭なく。世せ中もなほ又宜敷時節もゐるべし。勧を第一ふて致まべしと申聞たり。然るふ荷積持運び等の様子見受るふ。手當向等も以前ふ異り。金兵衛時代とハ違ひ。手ひどき様子故。蝦夷共の歎も尤なり。嘉兵衛時代より金兵衛より。萬般心残用ひ取計ひたまし

事と見え。蝦夷共迄も。公儀の御威徳を仰ぎ。何卒して以前の如く。公儀地を願居る心中と見ゆ。是全く公儀の盛なる化澤。自然ふ行をるものなるべし。松前の諸人及蝦夷共迄。金兵衛を慕ふ。同人在勤初。諸般の冥理を申諭し。召使ふ至るまで。指揮したるよしと聞ゆる。即功德の天命より顯はる。道理乎とぞ察せらる。松前秘説

○蝦夷人赤人ふ親む事

寛政七八年の頃。赤人大船一艘六十人内女三人。ノルハセの夷一人乗合。東察加より出帆比由。同年九月得

撫子渡來。ワニナウと云港を上陸して。家倉を作り居住す。初め辰年マツコタンを住せしが三人死し。己年三月廿八日歸國し。午年六月十四人歸國の殘り十七人内女三人。

此人數の内も死失歸國のきハ不足

公然として不去。赤人比長たる者二人あり。マイタラシと云者午年歸國を。今モケトフシといふ者殘て在留し。赤人比子も出生して。已モ五六歳モ及ぶ。其帥る夷人もまた赤人は風俗にして髭を剃る。シモシリ比夷シレイタといふ者來て。赤人の通辭をなす。鎌砲火薬縣しく蓄置き。十年餘常も用る。モ今猶蓄あり。赤人内鍛冶を見るものあり。犬の如き毛白く尾長き獸。持渡り畜置く。小船二品あり皮もて張り木筏骨も入。不用時を木筏弛し皮を疊む。大さ圓合船よう小なり。夷人モトントナツフといふ。赤人モマイタンといふ。一品モ木もて造る。夷人モロクシントといふ。赤人モ口ションナイと云。赤人來りし初め厚岸比乙名イコトイ。此島モ超年し。赤人と殊モ親しみ。イコトイよりモ赤人國王ヘ臘虎皮を獻す。前モ赤人共夷人モ對して。格別親しみたる事もなく。また毎度獵業をやら

そひける事ありし。辰年擇捉夷人等赤人在留後初
て渡海する時ふぞ。赤人格別于夷人或親み丁寧を盡
し。擇捉夷人例年の如く得撫嶋渡海せし。赤人其家
ありしゆゑ不審ふ思ひ。冲合ふ脚躅せり。然るふ赤人
夫より日本飲食砂糖等を贈り。ウタレふ至る迄。酒食
と以て饗待せり。其上獵漁せ事も。往古常ふ爭論あり
ケル。此度も不然。夷人臘虎を持往き賣らんといへ
バ。日本ふ出まべき產物なれば不可買。輕物を日本ふ
出まづしなどいへり。日本引網を以て漁事して。其魚
半を夷人ふ分ち與ふ。赤人云。向後年々日本產物持來
しと云。通航一覽。

○浴せざる事
らバ。彼國よりも品々持越し交易せべし。蝦夷地ふ日
本人來り居故。日本產物多かるべし。何品ふても持來
るべし。其内皮類尤望む所なり。また米も格別珍重せ
といふ。夷人を見る毎ふ。日本比米を所持せばやと再
三問ふ。米きら渡さべくバ。段物類何よても交易せべ
しと云。通航一覽。

石狩字ウエンベツと云所の曠野を行ふ。露深し
て満身濡ひきりぬ。土人も是をドンブリ々々といひ
てゆく。其意ハ風呂ふ入りしと云る晒落なりと。其故

も土人の法として。風呂に入る事なし。若運上屋等ふ
て風呂の中と。掃除ふてもさせんといらしむるが。
病氣ふて温泉ふても浴むるや。必衣服を着たる儘浴
むるなり。故よ如此云しなり。石狩日誌

蝦夷人を湯浴ハ勿論。朝起出ても手水つりふと云事
もねし。手拭をもくぬ故海よりもどうても。そのぬき
たるまゝふて。いろの火ふゆくうほきぬり。大小便
をしても手あらそば。草むらの中。濱邊比岩間ふひ
りちらし。夜卧ふもふきまもなく。アッシ一枚着くる
儘ふて寝るなり。夜中ハ往還ふ犬比絆くるやうふ。雨

露ふうふき。土間ふふして居るも拘り。あとふ野鄙
の極ふて。いまだ開けば。如レ此淺間しき体あるも歎う
もしき事ぬらば。孝弟忠信五常の道をとき。文字と
習をせ。耕作の道をもつゝへ教示せしめバ。人道ふか
ねふやうふ。多年を経也と。たしうつるべきと思
ふあり。夷諺俗話

○水豹等臓數を知る事

水豹を屠るふ。肺の臓六つ有。土人の言ふ。水豹を六枚。
狐ハ三枚ぬりと語る。土人ハ如斯事迄よく心附しげ。
實ふ不思議と云べし。知床日誌

○ベウタンケ比事

増毛より濱益へ渡る時。雄冬の下より難風より遇。船と岸へよせんと思へども。よほど沖を走る船故。濱邊へ寄る事なり。甚ぶ危ふり。水主人足の夷ども。ベウタンケと云げられ巴。

ベウタンケといふ。何事よりても異變の有る節。聲を立る事なり。甚憂悲なる聲より。もの凄き事なり。此は時濱邊へ。ロカルイシの夷小屋より。此聲を聞にけ。夷どもたひ駆出をを見請し。其所へ船をよせんとせしが。波至て高くまで。一舟中へ打込たり。

船は中海水あび。しき故。大びさく亦小桶あどにて。お達を汲出し。大ふ難澁する其内。所の夷ども大勢かけつけ來り。大繩を持て波をくぐり。舟は中へ放込し故。船中みて早速その繩とどり。漸々岸へ船着たり。夷諺俗語

○落葉を衣の代用する等の事

雨乞きり。雷もめきぬれば。夷人ども歎冬の葉をもて。蓑衣ふかへて着し。また其莖をねぢ折て。傘の如くさげ。行。谷元旦蝦夷紀行

○山神の酒を供むる事

夷人兩人。弓を携矢筒を負て案内す。此日山へ登る時。夷人等云々るも。先山の神ふ神酒を備へ。然るべしと云々る。是モ夷人等神酒と云て。實も後各飲べしといふ手段なりと。谷元且蝦夷紀行

○蝦夷地饑饉の事

東遊記ふ。天明四年甲辰比饑饉ふ。蝦夷地近き所の民家飢ふ及ぶ所ハ。蝦夷ども鹿を捕へ来て養ひ。子あど有て育かねたるをも。兎角してそぐくめる事也有といふ。常ハ蝦夷戎厭て逐拂ふやうさせしも。其力ふよみて助のりたるもの多し。誠ふ殊勝の事なり。今年の

春ハ他國より松前を渡モたる者。餓死ふ及ぶもの多り莫しふ。瀬棚といへる地方岩比間より。土ふらう。何とも志きぬ。青きもの湧出せると。取て食らへ。餅ふど食ふやうなるふ。餓を助のりし者多し。又。笠の實一万石程ねうて。大ふ土地のたまけとありき。千鳥志料

○蝦夷牧馬の事

松前所在島一圓モ。牛馬を飼ふ。山野ふ放し置なり。夏より秋ぞ青葉枯草なりて食物ふ飢ば。因て曠野ふ遊ぶ。冬ふ至りて雪降積せば。雪中より秀る薄の穂など。喰居といへども。極寒比頃ふねきば。雪も大ふ積り。

薄の穂も積雪も埋りて。食物絶ぬきば濱邊も出て。遠方より波浪も打寄らむたる海藻を拾ひて食ふ。其時を待て馬糞取集めて。雪の上もやらひを結び。其内も飼置て干草とて毎秋刈干て貯置たる。蓬交りけ茅と與へるあり。如此麿末せ手當なせども。馬の剛強なる事。日本比馬より類なし。轡を用ひて沓もそのせせ。山阪岩石磯邊河原等を厭そぞ遣へども。少しもひるむ事なし。略道もづら土人比風俗を見るよ。大古風俗かくもゐるべきのと思もるゝなり。馬士一人よて馬と五疋ほあぎ連て牽。往來するを見るよ。屈曲の山路も

て。人足もゐずらざる險岨の山坂等を。往來するも難しこも見えず。まさ夫より遙く過て。濱邊も出て通りけるよ。渚も飼馬と見て六七疋遊び居ければ。彼馬士そ此馬を撫ましし。能馬糞見そぐめて戾き。予不審ふ思ひ其故と問ふ。時も馬士云。某比馬二十日計以前も野放しあけるよ。いまだ見えず。よりて渚端比馬。某ゲ馬も能似たる故。得と捕へ見き。某ゲ馬も阿らびと云。予失しうと問へば。馬士が答ふ。若熊などふとらきたる。生てだふ居まば。終ふもいはう尋當るべしと云う。蝦夷草紙

○染料の事

天鹽ヘンケニウブといふ所みて。胡女う種々の色みて。アツシを織居くらしげ。其染方を聞ふ。赤く染る時も。ラルマニと云木みて煮ると。是も則伽羅木。俗稱於武古夷。稱伽羅木出於蝦夷及松前。土人呼曰於武古。和漢才圖會の木みて。水松廣東新語株唐韻曰株音永漢語抄木可爲笏也。和名赤檣人名用明記櫟等見也。共孰れう是あるをあらば。余そ土蘿木ふ當るう。其故も此木家財の地副よ用ひ置しげ。石ふ化せしあと度々有。土ふ蘿う易きより號る。又染物をねり蘿枋比惡き品ねうと

て。土蘿の名有うとも思ひる。松前木てオシコと云。家々染物をふひよ用るなり。是とオシコ染と云なり。鼠ふ毛沼ふ浸し置。黃茶ふ毛赤楊叶皮毛て煮。紫も岩松イギヤマの實。藍ふもシエイキナとて。深山の陰地ふ生じ。長二尺餘ふし。藍の葉比如くよて尖り。秋末ふ白花と開く。是みて染ると。按するふ是大青高二尺。好陰惡陽。搗汁可染重修興化府。新嘗會ふ縫殿寮より。調進の小忌箱館の地。寒氣強く紺屋なき故。種々の物みて染用ひし。追々ひらけ其染法も。今も誰知る者なくありし。

が。此山中ふも未だ残ま。天鹽日誌

○夷女うれめの事

ニゴリ川といふ所。夷屋七軒のうち鍛冶や一軒のみ。又さうふをのしき事。此里をあまふフライと
いふ女。年齢ハ二十二三歳。ふも侍る。錢百文づ
く。ふて。うか連女ふ出るよし。蝦夷け遊女も珍らし。
らん。袖ふうぬふも他生の縁とやら。嘸のしをうしき
事どもの侍らん。旅のうきそらしよ。一夜あぐさむべ
しといへども。誰のりてまくむものあし。左ものりね
ん。まべて蝦夷女ハ。きりやう比好も侍きど。身ふも彼

比アツシを着し。髪をあどろき亂し。化粧など勿論。湯
のひせし事もあきと見えて。きりあき事いふもうり
なし。その香なまぐさくして。ねりく百文をさらなう。
無錢みてもまくむ人のあきる。ことよりなう。西蝦夷
地高島

日誌

○夷女高雄と名のる事

西蝦夷。手宮ふ。番人の寵愛せし。高雄といへるメノコ
ぬり。此事かねて聞しより。又まほしくおもふ折の
ら。かの女子戻見きば。三味線のやうなる鳴るもの。を
口ふくもつてひき居たる氣色。さあづら秋の紅葉と

もあとふ勝きし粧。誠や都近き名所也。是ふもいのてまさるべしと。ねづめぬのぬ事哉思ひ侍り。同上

○藩士夷女の手を取て辱めらるゝ事

ある藩士。蝦夷地歴覧のため東部へ來り。根室より西別へ渡海也とき。圖合船ふ乗るふ。權をとりくるハ多く夷女みて有る。藩士其夷女ら手首は入墨を警視しあらずよく見むや。そのきり手もて夷女は手とどちらんとせしとき。根室の總乙名。仁助といふもの。船中ふ在しが。此有様を見ていひ々るやう。いうふエンドコタシ江都の比とのなりとも。女の手哉取給ふも。

らうがハしきあとよ侍るうし。そハ無用よなし給はなんやといひたりけ運ハ。流石は藩士も。當然の理よ窘めらき。赧然としてあうぞ々るとなん。東蝦夷夜話

○勇を以て感服せしむる事

釧路詰の有司。小田井某といふものあり。根室と釧路比領境を。見分のさめ庄屋精一郎。その外七人を引具し。食物卧具を用意して。安政四年正月二十日。釧路の役宅を立てる時しも。雪數十尺降積り。殊ふ當已年ハ。近年少稀なる大雪なり。ふあうも五日め七日めほどふ降積る雪の所よりてハ凡二丈もやあらん。

正月より二月ふもくるあらそ。常の年から雪比最中
よて寒威きびしく堪へつき折なるよ。山も積雪比上
をよぢ。沼川も氷を涉り。日暮あんとせれば。その所よ
丸小屋を補理志て宿きるふ。上下四邊雪ふ埋もき。夜
の更るふゑさゞひ凜々として。寒氣もよきて甚しく。
立樹まづら凍割ヒツヅルる音比きこえけり。そゞ中ふ何ものら
も。雪踏あらし來くる音のしづきば。小田井も大よ訝
うぬやしみ。いのあるあとのぬるようと。丸小屋の内
よう。ひそりよ窺ひ見きば。大やう馬などもやのらん。
白き班毛生ひくる狼と。雪比あからに見とめさり。小

田井もはらく思ふやう。今銃炮もて打捕るも餘りよ
容易く興少し。今よひハ空しく追走りぞけ。翌日の夜
來らば生捕らんものなりと。獨うあげき聲シカゲキ欸しあげ
ら。側なる薪を取て燃したつきば。焰の光りよおそれ
ぐん。いづちともなくゆき。影ごよ見えひなり。う。と
ううかるやどもなく夜の明ぬきば。雪頻りよふり風
さへ強々達ば。此日もあくよ逗留と定めつ。精一郎
その外夷人等よいへるやう。今日もまたおの雪よて
ハ打立がよし。さハ阿連ど小屋のうちよ夜をがら終
日蹲ウツクシり居て。あせ業あきよ徒然なう。僕偉あるうあ。今

よひも果して。よべのカムイは來うあん。其時こそ生
捕ふして牽もて歸らめ。そのなをやうも。雪中へ穿オトシナを
堀て陷いれ。翼ワタもてとらば易うもなんといつば。精一
郎をそじめ衆夷等を聳然として言葉なく。ゆくらう
ていひぐるも。そもけしからぬおほせりあ。決て無用
みし給へぬし。かきの他の獸とちがひ。神變不思議の
猛獸ふして。まゝよく群を集むるものなり。今あまじ
いふあと残なし給ひなば。ニシハ且那といふ残そじ
め。チヨヲカイウタレ私共とい。一同生ては歸らるま
じ。あの地みていか迷我きして。オホセカムイとて。獸

ねぐらも神と尊稱す。そもそもニシハ神ふしらうば。
かのカムイをあそ捕へませめ。かあらば手出しな爲
し給ひそと。請ひくけもひせらうざまば。其時小田井
そ憤然として聲をあげまし。衆夷ふ對ひていひぐる
やう。腑甲斐あきえみし等よ。人そ萬物の靈とおそい
へ。汝等とても五体具足人ならずや。丈夫の魂を左よ
からば。仮令かきめぐ幾千萬の群をあもとも。何のお
そる。あとらん。弓鎌炮もあ。ふらう。矢だ。孙玉
薬の盡くるときも。兩刀とて殲ふせんとて。衆夷の
言葉ふどりぬ。獨丸小屋と立出。凡五六歩とへど

てく。宍と堀う仕掛となしたり。されば。日をそや西ふ
入ころなう。小田井も今よひと手ぐせねひき。丸小屋
の内ふひそみ居て。夜の更るをぞまちくらぐる。かの
狼もはゞして。よべのあらまく來うて。そあら残うか
づふやうをと。衆夷ハおそれて目と目と見合せ。例の
イナヲと削みて立あらべ。頻ふカムイを拜むるのみ。
小田井もあくぞよき圖と。銃炮の火蓋をきり。空炮一
聲鳴り響らせば。狼ハ不意とうたきて。ふと足みだし
飛走さり逃げんとする。躊もとの雪ハざらく音の
みして。頬達落る程こそだ。雪と均く狼ハ宍の底へ

ぞ轉び落ぬる。小田井も得ゝモと。丸小屋より聲ふり
立て躍りいで。宍の側ふふみ跨り。狼の飛石ぐらん
とない所と。銃炮をもてはげけさまふ撃たりしが。腕
ふおぶえの小田井ふうこき。あふうはもつて堪らふ
べき。馬ふひとしき狼也。勢弱うて倒せられバ。衆夷ふ
命じて引ひげさせ。丸小屋の側へひきもて來まう。あ
れとき衆夷の中ふ。豪傑とよばれたる精一郎も。小田
井の手際ふ驚きおそれ。蝦夷坤輿以來オキ、リマイ
判官義經を。蝦夷地みて。オキノルミといへども。釧
路みてハかくいへり。

此外ふもニシバざときの英勇也。見も聞もおよばむ。
おままでシヤモ地の士達ゞよ。あらヨソウの山へ
お来うじ。深山をだよいとひ給へて。蝦夷地にてオホ
セカムイと尊む猛獸あると。やちくと生捕り給ふも。
オキ、リマイセ。再來みてやあそせらんといへば。小
田井も石ゝ笑々あがら。いあさみておなし。爾等よく
きけよ。此地より遙よ千里越へざてたる。エンドカム
イのおもしまい都といふも。爾等見聞を得ぐとぞ。ま
ども。おせきごときの力量ハ。小兒の群みかぞへられ。
一個の壯士といひがよし。おのきもとより匹夫の勇

を好みて。危戦あらざるふもあらねども。畢竟えみし
等も。事物の理よくらく。獸のあと残カムイとあして。
恐怖のこゝろ残をしつて。諭さんと欲せるのみといひ
きられバ。精一郎をはじめ衆夷等も。ともふさとうて
合掌禮拜し。且小田井が勇威ふぞ服しける。後小田井
語りていふ。總じてえみしを教化せんよも。愛憐とお
て専らとハされども。勇もて示すときハ。却て服従の
速あるものなりと。東蝦夷夜話

○蝦夷人を使役する事

唐太番人いふ。附添せ土人を日數を重ね。遠方迄行あ

とあ達バ。其勞を厭ひ折節肩を休め。或ハ勞し或モ逸し。氣分を引立て勧かせゆくも。增入足を所々みて取り。始終惰氣を生ぜざる様ふせざれば。遠路を行事ならば。一度惰情を發せバ。病ふ托して勧らう。一人如斯せば數人比氣合ふかゝ。甚ざ困る事ある故也。如此心得均るべしヒ。觀國錄

○蝦夷人ふ平伏せしむる事

松平信濃守。廣尾場所を通りし時。蝦夷ども手を合せ拜するも嫌ありとて。皆平伏をさせたり。是ふよつて蝦夷共云々るも。是まで拜したると止め。平伏する程

の事ハ。いのやうふまきバとて。蝦夷比難澁みなる事ふもな々きども。蝦夷の風俗を嫌なる御役人の來しよても。此末何程う嫌ひの事あるべし。徃々も難澁もへらむと。酋長クシユバク并トマシヲ。其次の酋長シヤンケモツチ并シャルシヤ等。一統歎きて語々る。尤なる事あれば。安心の爲ふ云含めんと思ひて。一休蝦夷風俗を嫌ひの御人あらバ。此邊土へ好みて旅行する道理ハ。へらば。按するふ通辭俄ふ老少大勢の者へ。一言よて聞ゆるため。嫌ひふりといひし事ならん。公儀も民の歎き我押てなせる事あし。亦致方有べしヒ

云含て。鬼角難有と云もの稀あり。最上常矩厚岸亂申上

○井を堀る事

國後嶋ふてハ。鹽水を汲て飲食ふ用ふる。其質ぬしく。病を發するも少少うらば。當所せ在住重松熊五郎といふものハ。井水を撰ぶ事妙を得たれば。其地を見極め。井を堀むべし。六月中。正養此島へ着此時。申置たりし故。則熊五郎所々を撰て。會所の邊にて其所を見極め。井を堀らせ。其水至て清冷ふして盡る期あし。正養び歸るまで。井桁そぞ外全く成就しきり。夷人とも井といふやせを見て。水なき所ふ水を

求むる。日本人の智測うのこして。驚歎せしもいと。をかしありき。是よりして此嶋ふ住むの。始て水毒を免ぐる。事を得く。是熊五郎う功なま。則此井を重松は井とあづけ。永く此島の名蹟ふせよ。○休明

○蝦夷地へ穀種を渡さる事

江差及箱館近在も。悉く畠となり。土産ふ。大豆小豆粟稗蕎麥角大豆菘蘿蔔莧種。其外何ふても相應ふ。產せり。當時ふても稻種を蒔ざるのみ。僕俊明廣の御時。奥蝦夷地ふ通路し。厚岸ふ到る。此所の運上小屋ふて。朝夕の遣ひ水ハ。山の麓ふ少し涌出る清水を汲み運

ふなり。予行て見るふ湧出る泉の邊も。谷地にて自然と生くる稗の稔りたる所。是則粟稗の産する証據あり。然るふ彼國法みて、蝦夷地へは。もべての穀物の種を渡す事停止なりと。是嘆むべきの甚ふらばや。窃ふ考ふるふ。蝦夷の土人農業手力を盡して。漁獵の生産を減ざる道理なき。漁場請負人どもの交易品不足し。運上金を減せんとの故あるべし。冀る土人ふ粟稗を始め百穀を作らせ。農業の利益をあらしめバ。終よハ良民となり。上國となるべきハ必然ならん。因て當今の風を化して。人道よ染ましむるの計策本

あるべきなき。後此君子之を思へ。蝦夷草紙

○ 疾病の事

疾病も。夏夷の差別ぬりて。日本人の眼より見き。異なる事數多所。先蝦夷人ハ。日本の風俗よ化し。染ざるやうふと。松前領主より令せしむる所なき。永久よ化し染まじ。仮よも蝦夷土人。日本言葉をつゝへば。通詞是を責て。令よ背くる科のうきびときむくいとして。過料を出させ。罪をうぐなもしむるなり。蓑笠と着用し。草鞋脚絆をはけバ。是又前の如く。もべて日本風俗よ化し染ざるやうふと見る。松前領主の榎あ

う。依之跣足素脚みて。岩角樹木根籐原の厭あく往來し。雨降キバ。天窓よりぬキ。我家より歸りても沐浴ハせバ。獸類の如き境界あう。おき皆令の志からしむ所なり。元來日本人と種類等き人あキバ。疾病も又等しき苦なり。の故よ疱瘡或ハ疫病流行をキバ。傳へ移るほと異なるハあし。因て家宅を捨て。深山幽谷より逃行住居し。其流行病絶て後より歸り古郷より住あり。親子夫婦の中も。看病介抱もキども。其他ハ皆見離し見殺ふして逃去るなり。是より醫藥もあき故なり。實より堪がこき事どもよて。かく淺ましき國政より逢ふ人間も

有あけ哉と。吾身より引別して顧キバ。日本の御代の有がたきを忘れ難き事なり。蝦夷草紙

蝦夷地より痘瘡のもやる時ハ。夷人ども皆深山より逃れる故よ。其年ハ產物の出方も少し。夷人ども常より穀類を食せばして。多く肉食のみあせバ。痘瘡あどぞよづらへば。忽より死するもの多く。多きが故なり。北海隨筆

○蝦夷地より鼠群集の事

辰年六月より九月まで。松前及び蝦夷地のあらじ。鼠夥敷集りようし事なり。其年留萌にて。鮭を積込んだる穴藏へ。鼠おびたゞしく這入居るゆゑ。其所の支配村

上長三郎ハシマサト。大樽オオヒタツ四つ。水をそらうりて入置。翌朝。あれをみるよ。四樽ヨリとも鼠ねずみ一イチをいふ陥カニて死マミし居リたり。その數如何程と云事をあらびとねり。且蝦夷エホウイの小兒こわらわを養くふ。少さき板いた四隅ヨリみ繩ひもを付。屋根やねうらアラふ釣つるし置。夫へ小兒こわらわをいれ。啼なき出で時とき。是をゆまぶう。まく乳うぶをのませなどして置事おきことあり。留崩リボクよて右ひだり如ごとくふせ。一儘イハタ。その親終おやぢふ寐ね入りたり。その小兒こわらわへ鼠ねずみからりて遂ついに喰殺くいちやくせしと。まく長病ながびを煩うなづひ居リたるも其そのの足あしを鼠ねずみ喰くきどむ。大病ながびの事故じこ聲立こゑだてる事ことも能めざれば。是も終ついよ鼠ねずみ喰殺くいちやくされこう。家いえハ勿論野のふも山やまふも。如此

數萬の鼠ねずみをびありしが。次第すじふ減へて四五ヶ月よ廿内ナニ。残のこらば絶絶しと。此鼠海ねずみのうみをまくろり來くわ。まく海うみを渡わたりて行はしよしなり。夷諺俗話エホウイハガタハ

○文字及暦法なき事

蝦夷エホウイが鳴なきふハ。文字カタカタも暦法カタカタもなぐれバ。おのぎ生うきさる年月よも。父母おやぢの没ぼくしたる忌日忌日をあらば。古く歴代カタカタを辨べゆるよ。相互シラフよ年齡ねんりを以てて引別ひわけちゆるのみ。正カタカタ何カタカタ年以前何カタカタ月といふかとハ更またふなき事ことねり。例ハシマタバ此翁エホウイの幼おさななるときよ。此事ことのりしと云いふのみなり。又年中四季シキの寒ムカシ暖ムカシをかねて伺まつひあるみち。魚虫うおむし等などの出没でぼつ。

或ひ草木の枯槁繁茂。或ひ鳥獸の往來を見てあり。朝聲を聞いて察し。何日よして其節季至ると正よある事能しげ。暦ねりれバ。何よ因てあるべきやうやらんや。

津輕外ヶ濱と。松前の瀬戸ハ。冬中ハ風烈しく。渡海中
絶止る事毎度。よて。新春よりても。新暦の渡らざる
事なり。是より由て松前民間よハ。容易ふ新暦の得がた
きより起りて。舊年の十二月小の年よも。他國ハ翌年
せ元日ねれども。松前ハ舊年の大晦日ねり。是を彼地
よ名けて私大と云ふ。然れば天明六年正月。予松

前を發足して。蝦夷地より趣きし。三ツ谷と云處より至
れば。松前町人阿部屋傳吉と云者居たりしが。問曰。
當年元旦は晝頃。俄より天曇り闇の如くとなり。因
て蝦夷の土人共大きよ騒ぎ。いのなる天災によりて
り。斯くゆりしと云ふ。其詞の内より。略暦一枚與へた
る。元旦より日蝕ある事を知りて。大よ悦びたり。
是よりて近村をはじめ。眞蝦夷地の土人どもよ。元日
日蝕なる事示して。疑惑を晴しけり。思ふよ此等の開
國より。第一の欠くる所なき。早くも補ひたき事な
す。蝦夷草紙

○廁の有無及大小便の事

夷中なべて。大小せ便をなむ。外見と恥辱と也。男子
ハ小便さるふ。稀よハ恥ざるものなれど。大便ふ至て
甚ざ慎めり。女子まゝ殊よ甚し。人向いてもし見るも
のあきば。夷女の法として。償と云事をなむ。故ふ夷中
謹て其法を犯し破らば。松前志

男女大小便所を異ひ。男子ハ凡三尺せ高棚を設け。
女子ハ一尺許せ穴を堀。板二枚を並べ置く。男子誤て
女子せ便所へ入迷ハ。チヤランケと唱へ。大小男子へ
恥辱と與ふ。尤右せ位置ハ。家屋より十間許隔て設く

るなす。蝦夷雜書

蝦夷人ハ男女共ふ。二便を何方へねり。人よ知しむ
る事なきものふて。廁とてむな。風雨の時といへど
も。戸外ふ出て二便なむ。他人ハ知らざるなり。止百
里セ俗也。粗似くるふや。葛模止葛杜の夷俗也。不潔ふ
て。自己の小便をたくまつて。浴坐といへり。有北紀聞

○雪焼の事

文化元甲子年正月七種を過て。紗那を出て。夷人ども。
得撫島へ渡り口アトイヤと云所まで出張す。此時雪
中といひ。殊ふ極寒の砌ゆゑ。雪焼と云事あり。耳并ふ

陰囊をよく手當して。燒ざる様いゝをなう。たとへ手足を焼ても苦からず。陰囊耳をやけば。命を拘ると乙名夷教ていふ。是よりて真綿。或そ狐の尾をもつてよく包み。頭を頭巾二重にして。眼ぞりりを出し旅行す。中此日纔一里程みて夜に入。右せ手杖を突き。左も袖に入歩行し。頓てトウロ入着。夷家止宿也。入口みて杖を置んとせし。指ひらうざるゆゑ乎。左みて取て内に入。其儘焚火みて暖まり。夫よう旅裝を解とせし。右せ指一向用立。居令せし番入夷人乎。其由を問へば。雪焼なりといふ。藥をなしやと問へば。さ

し當う熊膽を塗あよしと云。ゆゑよ持合せし熊膽を塗置し。少々腫も見えだ。まども痛もなし。三十日程過て指は皮ときて。元は如く愈たり。松田氏四
六筆記

○飼犬窓より落人の事

トウロと云所止宿せし。朝飯膳居る時。窓より犬一足膳の上より落たり。側より居合たる番人夷人も。仰天し見き。此家の飼犬なり。夷家を軒比高さ六尺餘にして。堀建草葺屋根。三尺四方ほどの窓なり。入口へも圍ひとて。茅を以て簷より。是を建通し。道を細く雪を堀明てあり。雪降積り夷家を埋めて。平地の如く

ふなし。夫故外も大荒大風みても内ふ居れバ風有を
もあらず。焼火を囲り暖ふして凌ぎよし。此故ふ犬も
常比如く。平地を狂ひ遊びて思もば。窓より落しなり。

松田氏四六筆記

○小人穴居せし事

擇捉村落比内。小人住居せし土穴あり。其口三四尺許
ふして。奥を二三間位ありて。本邦金山の舗ふ似たり。
夷人も是と小人住居せる穴といへう。いふし一夷人
は住居せざる前ふを。小人皆嶋ふ住居せりと。年數を
経し事ふをなきと夷人語通り。八九十年以前國後の

夷人。此擇捉嶋ふ渡りしより。彼の小人漸々ふ離散せ
りといふ。紗那藥取邊ふもぬきど。シヤウツケヤふ多
く窟穴あり。數十年を経たることあきば。穴崩欠て全
備せるも稀なりといふ。

惟邦考曰。小人比國を新增刀といひて。クルウシヨ
ントセ近國なり。その國永海ふして。擇捉を距るこ
と數千里なり。擇捉センフ拉斯共ふ。大底氣候相似
たり。センフ拉斯擇捉ようも。又永海なり。如斯比數
千里ぞ隔たる國より。擇捉へ来て住居し。本國の新
増刀へ坂といふも不審イハカシきことなり。又曰。新增刀と

云なれば、彼西洋諸厄利亞紅毛みて。ノウハといふ
も。新しく見出たると云蠻あり。然も新たふ見出た
る小人國なりと云べし。

尖山增刀近所也。悉く永海にして。西洋の人も近年
迄も行たるあとなしといふ。諸書も出たる通り
なり。擇捉み往古より所在嶋の内より。擇捉へ夷人渡り
て。住居あせしゆゑよ。小人離散して。永海の内無住
の嶋を。見出て引越せしも計りがたし。彼是いふの
しき事どもねり。尚識者の考を待へし。熱多羅
拂談

○オキナ魚の事

利尻サルゝの間。平日海水渦まき。赤達モオナキとい
ふ大魚。蝦夷人モ赤キアトイユウカムイと云。アト
イカ海。ユウモ持。カムイモ神みて。海持神といふ言な
り。大さ凡二三里ぞのり。大魚なるよし。天氣快晴の
時也。かならず浮出といふ。背黒くして小山。如くな
り。是故アトイシカスマカムイとモ云。是モ海を闔て
住神なりといふ言なり。オキナといふ言也。林子平ウ
三國通覽も出だう。夷諺俗語

○カチコルイベ魚の事

カチコルイベといふ魚也。頭ハ鰓ふ似て。背より腹
へ通うたる穴あり。尻ふ角せばとくなるもの有と云
う。東蝦夷地巡覽せし官士の物がさうふ。東蝦夷地ふ
て。夷人漁ふ出くるものゝ網ふ。此魚の死くるがか
りし故。是を手みてそづし流し遣うるふ。其手次第
ふ痛強くなうて。遂ふその片手あげたりしと。此魚海
中みて角を出せば。夷ども其所を早々逃退となう。若
その氣ふ何さりぬれば煩ふと。考ふるふ一角といふ
ものふや有べき。夷諺俗語

○カムイシマ魚の事

西蝦夷地サンナイといふ所ふ。カムイシマと云石也
り。此石黒き石みて。蛇の横こもりたる如き摸様白く
なり。若此石を誤てふむ時も。病死坐とて。夷共大ふ恐
るゝ事なり。夷諺俗語

あたしの身を歸す。かのう。かのう。かのう。かのう。
かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。
かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。かのう。

蝦夷風俗彙纂後編卷七終

